

名人との出会いが、高校生の人生を変える!!

「聞き書き甲子園」という取り組み

自然と共に生きる技術や知恵を身につけ、生業とする森・川・海の名人に、高校生が聞き書きをする聞き書き甲子園。両者の出会いは、さまざまな化学反応を生んでいるようだ。運営を担う共存の森ネットワークの吉野奈保子さんに聞いた。

共存の森ネットワーク理事・事務局長

吉野奈保子

●よしの・なほこ 1965年東京都生まれ。津田塾大学国際関係学科卒。出版社勤務、民族文化映像研究所所員を経て、第2回(2003年度)の聞き書き甲子園から運営に携わっている。

なぜ高校生が聞き書きをするのか

——聞き書き甲子園が始まった経緯を教えてください。

林野庁が計画した「森の名手・名人」の選定表彰制度の立ち上げが、事の発端です。その有識者会議で、聞き書きを精力的に行っている作家の塩野米松先生が紹介してくださっ

たのが、アメリカで一九七〇年代に行われていた「FOXFIRE」というプログラムでした。高校生がアメリカ開拓時代の伝統的な手仕事や森の知恵について取材し記録する取り組みで、こうしたプログラムを導入すれば、賞状を渡して終わるに留まらず、名人の知恵や技を後世に伝えることができる提案してくださったんです。

開催は、二〇〇二年から。第一回は林野庁・文科省が主催し、第二回以降は、NPOが運営を担ってききました。第十七回までは、表彰された各都道府県の名人のもとへ高校生を派遣していましたが、二〇一九年度の十八回からは、高校生の受け入れと名人の推薦に協力してくださる自治体や地域団体を公募するようになりました。

た。一例を挙げると、新潟県柏崎市では、地元の街づくりで携わるNPOが手を挙げてくださいました。山形県酒田市の飛島では、島にインターン・Uターンした人たちが設立した「合同会社とびしま」という企業が

受け入れ窓口になってくださっています。また、図書館がコーディネートして地域の名人を推薦してくださった宮崎県都城市のようなケースもあります。

第十九回は昨年度同様、全国十二

地域の市町村や地域団体と連携して実施する予定です。一つの地域から六〜八人ほどの名人を推薦してもらい、そこへ高校生が一对一で聞き書きをしにいくというかたちです。

聞き書き甲子園の一年

——聞き書き甲子園は、約一年の長丁場だそうですね。どんな流れになっているのでしょうか。

毎年定員の二倍ほどの応募があるため、応募動機を書い

た作文をもとに選考を行っています。どの名人の元へ派遣するかは事務局がマッチングします。本人の希望も考慮しながら、片道五時間以上かかるようだと高校生も大変なので、移動距離も勘案します。なかには、一泊二日で取材する高校生もいます。初めて聞き書きをする高校生ばかりですから、事前に三泊四日の研修を行います。第一回は有識者や著名人の講演を聞くことが中心の研修でしたが、それだと高校生にとっては少し退屈。なので、二回目からは卒業生にボランティアとして運営に加わってもらい、実践的なワークショップや後輩への指導を率先してやってもらうようにしました。

高校生の受け入れ先を公募に切り替えた昨年度は、まず同じ地域に派遣されるメンバー同士がグループになり、各地域でコーディネートをし



聞き書きを指導する塩野米松氏